

(第7号様式)

## 学位論文審査結果の要旨

氏名	仲地 究
審査委員	主 査 檜垣 高史
	副 査 竹中 克斗
	副 査 徳本 良雄
	副 査 岡 靖哲
	副 査 ミヤケ 深雪

論 文 名

COVID-19による学校閉鎖における子どもたちの心理的・行動的变化の違いについて

### 審査結果の要旨

#### 【背景と目的】

2019年12月末に中国の武漢市で発生した新型コロナウイルスは、世界的流行を引き起こし、世界中の国に影響を及ぼした。日本では3月2日から小学校から高等学校までの一斉休校が始まり、4月7日に緊急事態宣言が発令された。長期間の隔離や孤立は、児童への精神的健康に影響を及ぼすことが懸念される。本研究では、日本における緊急事態宣言による長期間の自宅での自粛が児童へ及ぼす影響について、児童の年代における差があるかをアンケートに基づき検討した。

#### 【対象と方法】

愛媛県内の発達に関する受診歴がない6-18歳の子どもを対象に、母親に対してインターネット調査を依頼した。緊急事態宣言中における自粛が児へ与える影響に関連する事項を質問項目とした。募集期間は2020年4月30日から5月8日までの9日間とし、スノーボールサンプリング法を用いて募集した。636名の回答を得た。対象者を、6-8歳（小学校低学年）、9-11歳（小学校高学年）、12-14歳（中学生）、15-18歳（高校生）の4群に分け、群間の差は $\chi^2$ 検定を行った。統計学的有意水準は5%とした。

#### 【結果】

有効回答は535名で、小学校低学年群が145名、小学校高学年群が124名、中学生群が132名、高校生群が134名だった。「自粛により児がストレスを感じている」では「あり」としたものが

78.9%だったが、各群で有意差はなかった。ストレス内容として「友人や先生に会えないこと」が小学生低学年群で有意に低かった。「行動制限への理解」「新型コロナウイルスそのものへの理解」は小学校低学年群で有意に低かった。「泣いたりぐずったりする」「落ち着きがなくなった」の質問ではそれぞれ小学校低学年群で有意に高かった。「甘えるようになった」では小学校低学年、高学年群で有意に高く、「眠りの様子が変わった」では中学生群、高校生群で有意に高かった。

#### 【考察と結論】

長期的な自宅での自粛による影響は各世代で差が見られた。小学校低学年において、分離が十分に行えず、甘えや退行などを引き起こしやすいことが考えられた。中学生、高校生では自粛により夜更かしや昼夜逆転など睡眠に関する問題が増加することが示唆された。長期的な自粛下における児童に対して、各世代の特徴にそった対応やサポートを行うことが望ましい。

本論文は、COVID-19による学校閉鎖において、子どもたちの心理的・行動的变化の違いを分析し、どのようなメンタルケアが必要であるのかなど、未曾有の出来事に対して迅速に研究を進め明瞭な結果と十分な考察が提示されている。

公開審査会は、令和5年2月2日に開催され、申請者は、研究内容を英語で明確に発表した後に、審査委員から本研究に関して、

- 1) スノーボールサンプリング法で得られた結果は一般化するのに妥当なデータかどうか。
  - 2) 回答者を母に限定した理由や母親の仕事や精神状態など家庭背景による影響について
  - 3) アンケートの同意について
  - 4) アンケートの回収率、収集速度について
  - 5) コロナ前後での比較を行ったものかどうか。
  - 6) すでに流行から3年経過しwithコロナの体制となっており、学校再開後のタイミングなどで再度調査をするべきとのコメントについて
  - 7) コロナ禍では強制的な学校閉鎖であったが、通常の夏休みとの違いはどうか
  - 8) 本研究を踏まえて、今後具体的にどのようなメンタルケアを子どもたちに行っていくか
- 等、多くの質問がなされ、それぞれに日本語で的確に応答した。

また、今回の研究に引き続き、愛媛県A町の中学校2校を対象に実施したアンケート結果で、コロナ禍の経験の有無での差異についての改正結果も紹介し、今後必要とされている研究の展望についても示された。

審査委員は、申請者が本論文関連領域に対して学位授与に値する十分な見識と能力を有することを全員一致で確認し、本論文が学位授与に値すると判定した。